

Title	民衆文芸の系譜学
Author(s)	林田, 雅至
Citation	大阪外国語大学学報. 77 p.53-p.71
Issue Date	1989-03-20
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/81221">https://hdl.handle.net/11094/81221</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 民衆文芸の系譜学

林 田 雅 至

## Uma genealogia da literatura popular portuguesa

Masashi HAYASHIDA

A literatura popular portuguesa, transmitida oralmente ou por escrito, já existe desde o período pré-trovadoresco como uma inspiração básica da *literatura portuguesa*. O povo, considerado como o *profanum vulgus*, foi sempre desdenhado pelos letrados e humanistas como Sá de Miranda e Camões: Tudo o que viria do povo há-de ser necessariamente tosco, imperfeito e irregular. Por outro lado, a ingenuidade natural e a espontaneidade pura do povo continuam vivas desde a tradição lírica popular da Idade Média até aos nossos dias. Só nos fins do século XIX, o grande mestre José Leite de Vasconcellos, primeiro etnólogo português a proclamar a grande importância do trabalho de campo, consegue aceitar que o vulgo ou o povo tem em potencial as qualidades da gente polida e sábia. Este juízo da objetividade antropológica José Leite de Vasconcellos obteve através de estudos de canções de trabalho da remota Trás-os-Montes, e de estudos comparativos entre as tradições populares portuguesas e as cantigas paralelísticas.

### Prologus 史的に《民衆》を理解するために

0.1 ヨーロッパの最南西端に位置するポルトガルは十字軍運動の申し子として13世紀半ばに Reconquista(国土回復運動)を完了し、領土的・国民的統一を成し遂げている。

建国当初から王権も強大で中央集権国家の様相を呈しており、英仏ならば16世紀から17世紀にならないと歴史上登場することのない、絶対主義体制の精神的基盤である《王権神授説》がすでに14世紀中葉成熟し確立されている<sup>1)</sup>。

王権は神から由来するもので神聖かつ絶対であり、王は神にのみ責任を持ち、国民は王命に反抗することは許されない。悪王に対しては王の改心を神に祈るだけである。君主は地上における神の映像であるから人間として取り扱うべきではなく、君主の中に全国民がいわば具象化されていると考えられた。

0.2 そして大航海時代の幕開けとして始まる15世紀の海外進出以来1821年の自由主義革命とそれに続く'30年代の改革に至るまで国王を頂点とする聖職者・貴族・平民という厳格な身分制社会・アンシャン・レジーム（旧体制）が敷かれている。

0.3 16世紀前半に実質上教皇庁から買収された異端審問制度 (Inquisição)<sup>2)</sup> はもちろんカトリック信仰をできるだけ純粋に維持することに尽力するための宗教的機関であるが、公然たる背教・異端のみならず、信仰から逸脱する疑いに対しても弾圧を加えた。そのため異端の疑いは教義や、天文学・気象学・生物学・医学の多様な領域に及ぶ広義の《自然学 (filosofia natural)》から哲学・文学に至るまで向けられた<sup>3)</sup>。

0.4 ところで制度設立の真の動機はきわめて政治的・経済的なものであった。

盛者必衰の理をあらわし、大航海時代・ポルトガルの栄華は短命ではかない。15世紀末から16世紀20年代にかけての最盛期の頃すでに海外交易に要する巨額の費用のために生じた、フランドル、カスティリャ金融市場での莫大な借款が早くも国家財政を圧迫し始めている<sup>4)</sup>。国王による交易独占体制・国家資本主義の崩壊の徴候である。

海外進出以前ヨーロッパの相対的に狭い市場だけで経済が維持・運営されていた時代、王室の奢侈・贅沢を満足させるために財政的手腕を示したのは主たる財政官職を独占していたユダヤ人であった。宗教と経済を引き換えに彼らの国内在住は可能となっていた<sup>5)</sup>。もちろん中世カトリック教会は彼らの宗教に一切干渉することはなかった<sup>6)</sup>。

このように国王はユダヤ人に経済的な恩義を蒙っていたにもかかわらず、それを裏切るような形で、制度・宗教裁判の後に執行される焚殺刑・火刑が商業活動に比類ない才能を遺憾なく発揮するユダヤ商人・資本家・高利貸しに国民とりわけ平民が一様に抱く、彼らに鬱積する経済的憂さに由来する憎悪感情を払拭するための祝祭空間である<sup>7)</sup>とえば一方では一応筋が通っているように見えるが、他方ではユダヤ人がキリスト教徒でないことを正当な理由付けとして異端審問制度は司法上合法的に彼らから全財産を没収し、挙句の果てに国外追放に処してしまうのである<sup>8)</sup>。つまり、経済的社会活動を行なう資本家ユダヤ人の財産が狙われたのである。

当然この制度は中央集権化を推進・維持・強化する政治的役割も十分に果たしたと言える。

0.5 18世紀後半になってフランス啓蒙思潮の影響を受けて主として医学サイドから制度が切り崩されることになる。臨床医学の導入である。時代は動乱の変革期を迎え、1821年制度は全廃される。ポルトガル近代の黎明である<sup>9)</sup>。

0.6 ここまでざっとポルトガル近世史をたどったのであるが、その特徴は身分制度の固定化、宗教的な呪縛・締め付け、絶大なる国王権力を支える《王権神授説》であり、身分上最下層に位置

する平民＝民衆は旧体制の中で身動きが全く取れず、異端審問制度が嵩にかかった感のあるカトリック教会の羈絆は厳しく何もできず雁字搦めである。

半ば神経症にでもかかったかに見える民衆は社会的に優位に立つ人々に対して怨恨感情（ルサンチマン）を抱き、またその感情を募らせて子々孫々に伝承するが、現実の権力＝国王に《反抗の鋒先》を向けようとしたところで、《王権神授説》が見え隠れし、その反抗、つまり全国民の具象である国王への反抗が結局自らに向けられること＝自刃するに等しいことに気付き諦観せざるを得ないのである。精神的に苦境の深淵に打ちひしがれる彼らに同情の念は禁じ得ない。

0.7 ギリシャ・ローマ世界が彼らに《冒瀆の民 (profanum vulgus)》という烙印を押した<sup>10)</sup>のを嚆矢として、彼らはイタリアの影響を強く受けた Sá de Miranda (1485?-1558)、近代ポルトガル語の定礎となるポルトガル人の事蹟を語る叙事詩『ウズ・ルジアダス (Os Lusíadas)』(1572) の著者として知られる Camões (1524/5-79/80) などのルネサンス期の詩人から、自由な発想をする偏見に捕われない理性的な知識人・人文主義者の対立概念として、《粗野な／不完全な／不道德な》という形容詞を冠され、軽蔑されたのである<sup>11)</sup>。

0.8 ポルトガル人文主義者として広くヨーロッパで令名を馳せた André de Gouveia (1497-1548) はフランスのサント・バルブ学院長を務め、その学校教育法・組織論は当時革命的と謳われた<sup>12)</sup>。

彼の弟子の一人、フランス人文主義者の代表格である Montaigne (1533-92) は新大陸の原始人・インディオの《野生》《純粹・単純な素朴さ》を讃えて彼らを《高貴なる野蛮人》と呼び、極度に理想化をするものの<sup>13)</sup>、ここで言う民衆に対しては先の2人の人文主義者と同意見である。野卑でありふれた、粗野で無知な輩と捉えている<sup>14)</sup>。

0.9 エネルギーに満ち溢れ野蛮でさえある、一方自然で純粹な民衆の《野生の思考》が客体として客観的に評価されるようになるのはポルトガルでは19世紀も末になってからのことである<sup>15)</sup>。

私たちは以上のように通時的に民衆に関する歴史的な位置付けを念頭に置かなければならない。そこではじめて民衆が口承によるにせよ書承によるにせよ伝統的に維持し、当然共時的・同時代的にも、また通時的・歴史的にも内容・形式の両面から変容させながら、共有財産・共同の知の束として伝えていった民衆文芸について論の展開をはかることが可能となってくるのである。

## I 古歌謡の時代 Trovador (吟遊詩人) と Jogral (遍歴楽師)

1.1 13世紀初頭から14世紀中葉にかけて早くもポルトガル文学史上稀有な黄金時代が到来する。3つの代表的な古歌謡集 (Cancioneiro) が編纂される (13世紀末～14世紀)<sup>16)</sup>。そこには文学作品として最古の文献に属する、近代ポルトガル語の前身・ガリシアーポルトガル語で書かれた作品が収められている。

これらの作品群は内容的に通常三つに大別される。女性から男性に送る恋歌 Cantigas de amigo, 男性から女性におくる恋歌 Cantigas de amor, 嘲り・罵りの歌 Cantigas de escárnio ou maldizer で

ある<sup>17)</sup>。

そして歌の詠み手は trovador と jogral に範疇分けされる。前者は一般的に貴族階級であり、特におよそ139に上の作品を書いた言われる国王 D. Dinis (在位1279-1325) は顕著な例である<sup>18)</sup>。後者は民衆・モロ人・ユダヤ人・少数の下級貴族から構成されており<sup>19)</sup>、私たちの注意を喚起するのは後者である。彼らは聴衆によって内容を巧みに変更している。宮廷では宮廷風の Cantigas de amor を詠み、一般民衆を対象にしては風刺歌・舞踏歌、下層階級には官能的あるいは下品な戯歌で彼らを楽しませたのである<sup>20)</sup>。

1.2 ところで trovador は jogral の《歌詠み術》詞芸を粗野で下品なものとして疎んじ（ただし民衆は大いに歓迎し喜んだのである）、jogral のための書き下ろし作品を作曲・作詞することを取り、公にする作品のレパートリーにそれらを加えることを退けたのである<sup>21)</sup>。色事師の瀉血（静脈切開）職人が医療の名目で患者の女性にエロティックな行為に及び、女性は女性で歓喜に浸りながらも職人をたしなめるといった内容を持つ、14世紀第2四半世紀（1325-50）頃に詠まれた官能的気分の横溢した戯歌<sup>22)</sup>などは trovador からすれば歌とは呼べないのであろう。

1.3 さて私たちは口承文芸の流れを汲む女性から男性に送る恋歌 Cantigas de amigo にも注目しなければならない。

次に歌を一つ紹介しよう。

Garid vos, ay yermanelas  
Com' conter é meu mali?  
Sin el habib non vivreyu  
ed volarei demandari<sup>23)</sup>.

訳：

言ってちょうだい、苦しいのよ姉妹たち  
わたしの苦しみをどうして我慢したらよいのかしら？  
あの人なしには生きてはいけないわ  
飛んで行って、あの人を探したい。

中世イスラム支配下のキリスト教徒が使用した言語モサラベ (moçárabe) で書かれた、1075年前後の作品であるこの恋歌は Toledo (Tudela) のユダヤ人 Judá Ha-Levi の手になるが、一人の恋する乙女の気持ちを代弁している。

本来この民衆的な抒情詩の伝統はここからスタートすると判断するのではなく、ロマンス諸語に共通する抒情詩的基盤にそのルーツを求めるのが至当であろう。そしてその伝統は moçárabe による抒情詩群を中間的な媒体として Cantigas de amigo に受け継がれている<sup>24)</sup>。

興味深いことにこの民衆的な抒情主義は歴史の底流にその命脈を保ちながら連綿と生き続けている。

1.4 ポルトガル民族学の大巨匠 José de Vasconcellos (1858-1941) は学問の方法論に初めてフィールド・ワークを導入した先人であるが<sup>25)</sup>、北部遠方の地 Trás-os-Montes で民間伝承歌を採集し、まず1882年『ポルトガル民間伝承研究年報 (Anuário para o Estudo das Tradições Populares Portuguesas)』に寄稿（「古ポルトガル民衆詩 (Antiga poesia popular portuguesa)」）<sup>26)</sup>、ついで1932年頃採集資料を増補・整理したものが、1975年死後出版されている（『ポルトガル民間歌謡集 (Can-

cioneiro Popular Português)』第1巻)<sup>27)</sup>。

その中から代表的なものを見てみよう。北部 Bragança 県 Parada で採集された歌である。

	訳：
Três baras tem minha saia noba, Três baras tem e não me fai roda.	わたしの新しいスカートには3本のギャザーが折り畳んであるの、 3本のギャザー、でもわたしにはゆったりとした感じではないの。
A minha saia do paninho fino, Não ma deu cunhado nem primo.	つやつやした布のわたしのスカート、 義理の兄弟がくれたものでも、従兄弟がくれたものでもないわ。
A minha saia de pano delgado, Não ma deu primo nem cunhado.	つややかな生地 of わたしのスカート、 従兄弟がくれたものでも、義理の兄弟がくれたものでもないわ。
Que ma deu o meu lindo amigo, Que ma deu o meu lindo amado.	わたしのハンサムなあの人 that くれたのよ、 わたしの優しい恋人がくれたのよ。
Quando vinha das bandas do rio, Quando vinha das bandas do lago <sup>28)</sup> .	川縁からやって来た時に、 湖の岸からやって来た時に。

(『ポルトガル民謡歌謡集』第1巻, p. 297-98.)

反復・対照の表現・内容を盛り込んで成立する並行句が重ねられて全体を構成する。amigo-amado の伝統的な二者択一的な組み合わせ、その2語の -i- と -a- の韻、amigo と古語 delgado の語彙そのもの。これらはすべてこの田舎の民衆抒情恋歌の時代的な古さを物語るものであり、遙か彼方に遡る民衆的な抒情詩の伝統を感じずにはいられない。

1.5 次の古歌を見ればそれがよりはっきりするであろう。

	訳：
Ai ondas que eu vin veer, se me saberdes dizer por que tarda meu amigo?	ああ、はかないわ わたしは波を見に来たの あなたがそこで会おうと知らせてきたのでしょう どうしてすぐに来てくれないの？
Ai ondas que eu vin mirar se me saberdes contar por que tarda meu amigo? <sup>29)</sup>	ああ、はかないわ わたしは波を見に来たの あなたがそこで会おうと教えにきたのでしょう どうしてすぐに来てくれないの？

この Cantigas de amigo の詠み手は国王 D. Afonso III (在位1248-79) とおそらく同時代人である著名なガリシア地方の jogral Martin Codax である。

対句に畳句が付加されているが、反復・対照の並行句という構成は前の歌と変わらない。amigo の語彙。これも共通する大きな特徴である。

1.6 この民衆的な抒情詩の伝統は先に触れた民衆の《野生の思考》の自然で純粋な側面を表わすものであり、ポルトガル文学・文化の通時代的な特徴であるばかりか、ポルトガルの国民性を考える上で重要な要素の一つをなすものである。

ところで《野生の思考》のエネルギーに満ち溢れた野蛮でさえある側面はここで取り上げている

Cantigas de escárnio ou maldizer に含まれる、あるいは jogral が一般民衆を対象にして詠んだ風刺歌・舞踏歌、下層階級向けの官能的で下品な戯歌に見られる粗野で下品な赤裸々な笑いの美学に垣間みることができる。

しかしこの笑いのエネルギーはこの時期を最後に詠み手の側からも聞き手の側からも消失する憂き目に遭わなければならない。否、同時代にあっても否定的な評価しか下されていないのである。ジョグラルの《歌詠み術》詞芸の批判は既に述べたところである (1.2)。

## II 散文の時代『家系書』と『夫の庭園』

2.1 国王 D. Duarte(在位1433-38) は中世百科全書の誉れ高い『忠実なる顧問 (Leal Conselheiro)』の中で読者に喜悦をもたらしてくれる、民間説話の一つにジャンル分けされる伝統的物語 (história) を難じている。それを理解するのにさして頭は使わないであろう。時間潰しの娯楽に過ぎないとまで言うのである<sup>30)</sup>。

14世紀中葉から16世紀中葉は《散文の時代》と呼ばれるが、教訓・模範的な色が時代を染めてしまっているのである<sup>31)</sup>。

2.2 この時期に編纂された説話に『家系書 (Livros de linhagens)』(4巻) があり、特にその第4巻は国王 D. Dinis の子息、Barcelos 伯爵 D. Pedro (1289-1354) の著作とされている<sup>32)</sup>。

子供向けの民間の騎士道物語に由来する、魔女が変容して山羊の蹄をもつ窈窕の淑女と結婚する Dom Diogo Lopes の数奇な運命を描いた伝奇的な「山羊の蹄をもつ淑女 (A Dama Pé de Cabra)」<sup>33)</sup>、シェイクスピアでお馴染みのポルトガル版「リア王 (O Rei Leir レイル王)」<sup>34)</sup>、モロー人に囚われた王女ガイアを救済する「ガイア伝説 (A Lenda de Gaia)」<sup>35)</sup>。これらは民間説話の一つのジャンルを構成する伝説 (lenda) として人口に膾炙することになる。いずれも上記第4巻に収められている<sup>36)</sup>。

また14世紀に属する Alcobaça 修道院古文書館<sup>37)</sup>所蔵『夫の庭園 (O orto do Esposo)』もさまざまな伝統的物語 (história) を収めた寓意的・神秘的性格を持った説話集である。その中の人間の物欲を戒めた「この世を順風濶歩 (A boa andança deste mundo)」は広く民間に流布し、もう一つの異文も含めて現代でもなお民間に伝承されている<sup>38)</sup>。

## III 民衆の笑いの美学の消失

3.1 16世紀に入って教会の統制はますます強くなる。伝統的に教会内あるいは教会前の広場で悪意がなく道徳的に実害のある過失を犯さないことを条件に行なわれていた民間の祝祭、歌謡・舞踏、世俗劇が最終的に司教管区規約によって禁止されることになった<sup>39)</sup>。

異端審問制度 (1536-1821) 設立で統制の厳格さは最高潮に達する<sup>40)</sup>。市民法もその動向に拍車をかける。国王 D. Manuel I (在位1495-1521) はセレナーデ(小夜曲)を禁じ、次代 D. João III(在

位1521-57)は信仰の保護と Coimbra 大学の名誉のために学生が夜間演奏をしたり、芝居に興ずることを禁止したのである<sup>41)</sup>。

民衆が持つエネルギーに満ち溢れ野蛮でさえある側面に由来する先に触れた赤裸々な笑いの美学(1.6)だけではなく、民衆の純粋で自然な側面から発露する素朴で陽気な笑いの美学すらも公に認められなくなってしまったのである。

3.2 この2人の国王の庇護下にあった宮廷劇作家 Gil Vicente (1465?-1536?)は中世世界の価値観を堅持し、作品の中でユダヤ人を弁護し、実質的に異端審問制度導入に反対の態度を明らかにする<sup>42)</sup>。

彼は笑いの美学の消失を、4月29日の王女 Isabel 誕生を祝して5月初頭に上演された悲喜劇『冬の勝利 (Triunfo do Inverno)』(1529)の一節で歎いている。

Em Portugal vi eu já em cada casa pandeiro e gaita em cada palheiro; e de vinte anos a cá não há hi gaita nem gaiteiro. A cada porta um terreiro, cada aldeia dez folias, cada casa atabaqueiro; (...) e no mais triste ratinho s' enxergava hũa alegria que agora não tem caminho <sup>43)</sup> .	訳: ポルトガルにはかつてあった それぞれの家にはタンバリンが それぞれの藁葺き小屋には笛が 20年前からこのかた 笛もなく笛吹きもいなくなった。 それぞれの家の扉の前には広場があって、 それぞれの村には十にも上る踊りがあり、 それぞれの家には小太鼓叩きがいた; (...) 最も悲しき哀れな小鼠にもかつては 一条の喜びの光が微かながらも見えていた。 今や喜びの生きる道は途絶えてしまった。
--	---

3.3 また一方、まとまった編集の説話も存在しない。Gil Vicente などの作品に挿入話として一部が紹介されるに過ぎないのである。

Gil Vicente 作『ルジタニア劇 (Auto da Lusitânia)』(1532) 劇中、ユダヤ人仕立職人である父と子が裁縫作業をしながら、声を揃えて吟誦する8音節10行の詩句が引用例として代表的なものである。

Ai Valença, guay Valença, de fogo sejam queimada, primeiro foste de mouros que de christianos tomada. Alfaleme na cabeça, en la mano uma azagaia, Ai Valença, guay Valença, como estás bem assentada;	訳: あわれなる Valença よ、可哀そうな Valença よ 汝れは業火に焼かれるがよい、 汝れはキリスト教徒の手に落ちるよりも 先にモーロ人の囚われの身となった。 頭には頭巾を被り、 手には短槍が握られている、 あわれなる Valença よ、可哀そうな Valença よ 落ち着いてゆったりしているが、
--	--



antes que sejam três dias  
de moiros serás cercada<sup>44)</sup>.

3日もせぬうちに  
汝れはモーロ人に包囲されてしまおう。

内容はレコンキスタされたヴァレンシアの地を奪還しようとするモーロ人の王をキリスト教徒の国王が蹴散らすシーンである<sup>45)</sup>。

出典はスペインの『エル・シドの歌』(12世紀)であり、レコンキスタという共通の歴史的事情からポルトガルに輸入され、15世紀に既に物語 (romance) として名前が Dom Alcidro と改められるなど国風化され定着している<sup>46)</sup>。

Gil Vicente はそれをキリスト教徒の国王がモーロ人の王を撃退する部分を省略して詠史化したのである。

ポルトガルの騎士道物語はすべてスペインに由来するとみてよいであろう<sup>47)</sup>。

3.4 16世紀半ば以降、短編小説 (conto)・虚談 (patranha) が新しく登場する説話のジャンルであるが、さまざまな作家に挿入句的に紹介されるにとどまっている<sup>48)</sup>。

16世紀末、ユダヤ系改宗キリスト教徒 Fernão Lobo Soropita は後代刊行された『未発表の散文と韻文 (Rimas e prosas inéditas)』(1868) の中で Proto 市に伝わる、渇きに苦しむ美少女を救って生涯幸福に暮らす王子の短編小説 (民話)「愛の三本のりんご酒 (As três cidras do amor)」に言及している<sup>49)</sup>。

17世紀 Porto 司教 Correia de Lacerda は聖王妃 Isabel (1271-1336)<sup>50)</sup> に関する伝説中、奸計に嵌って竈に入れられ火傷死するところを奇蹟のおかげで救われた小姓の物語 (história) を掲載している<sup>51)</sup>。

また16世紀末の人文主義者、ラテン語・ギリシャ語の教授である Manuel Mendes は『イソップ寓話集』の翻訳版 (1603) を上梓している。その第2部は増補として15のポルトガル寓話 (fábula) を加えている<sup>52)</sup>。

3.5 18世紀に至るまで比較的まとまった民間説話と言えば Gonçalo Fernandes Trancoso 著『有益なる教訓民話並びに物語集 (Contos e Histórias de Proveito e Exemplo)』(初版1575年) 以外にはない。筆者の執筆姿勢は教育的・道徳的であり、従ってキリスト教的道徳主義・倫理観が濃厚になっている<sup>53)</sup>。

一方執筆動機は1569年リスボンの大ペスト流行が背景にある。彼自身も一家すべてを失っている。ボッカチオの『デカメロン』(1353) にならい、死に直面して深刻にならないよう気を晴らすために作品は読まれなければならないことを念頭に置いている。そういう類の作品を目指したのである<sup>54)</sup>。

この場合は広義の民衆の笑いの美学とは一線を画して捉えておく必要がある。命と引き換えに採られた瀬戸際の手段に過ぎないのである。因に当時の『ペスト養生訓』(1495-96) にはペスト予防・治療策として心・精神の平穏がまことしやかに述べられ、心から満悦することが勧め説かれ

ている（第4章）。当世流儀では根も葉もないことではなかったのである<sup>55)</sup>。

特殊な状況があるにせよ、現在でも幾つかの異文が伝承されている民間に端を発する短編小説（民話）のうちで一つを眺めてみると、『悪銭身につかず』ならぬ「良銭は必ず身につく（O real bem ganhado）」は金銭欲を抑えて精神を豊かにしていれば、己ずと裕福になることを貧しい一家を範にとって描いた宗教的教訓話の傑作である<sup>56)</sup>。

3.6 ここまでをまとめておくと、14世紀半ばまでは王権神授説も確立される途上であり、国内も戦争が絶えず動乱期である。

ジョグラルの中には公的に追放されているモーロ人もいれば、ユダヤ人もいる。中世イスラム支配下の活気に満ちた豊穡なる文化的状況を継承しながら、レコンキスタが己ずと産み出す一種の鎖国的様相が独自の文化の醗酵・成熟を促す。その中から誕生したのがトロヴェードール・ジョグラルの文化であった。

少なくとも、イスラム教的なるもの、ユダヤ教的なるもの、キリスト教的なるものの三つの要素が相互に綯い交ぜにされるだけでも、文化は活性化され独自性を帯びてくるだろう。

王権の集中とともに、やがて異端審問制度が設立されてユダヤ教的なるものが彼ら自身とともに国外追放されてしまう。政治的国家権力は強大になり、宗教的権力は思想統制に乗り出す。キリスト教一色の純粹種の文化がますます研ぎすまされていくに従ってかえって地域主義的色合いが濃くなり、同時に文化の普遍妥当性も薄れていく。つまり文化の沈滞化現象である。

先に「半ば神経症にでもかかったかに見える民衆は社会的に優位に立つ人々に対して怨恨感情（ルサンチマン）を抱」（0.6）くが、発散できずに「精神的に苦境の深淵に打ちひしがれる」（0.6）と書いた。それに加えて彼らは『野生の思考』を笑いの美学の禁止によって閉塞せざるを得ない状況下にある。

そこで注目したいのはフェリペ朝によるポルトガル併合・支配下（1580-1640）に現われてくる、モロッコで戦死した Avis 王朝末期の国王 D. Sebastião（在位1557-78）の生還・ポルトガル救済というユダヤ教的なるものの精神的遺産・メシアニズム（救世主待望論）運動である。

Trancoso の靴屋 Gonçalo Eanes (1500?-45?) はその内容を盛り込んで『韻文物語 (Trovas)』に仕上げたのである<sup>57)</sup>。これが契機となってポルトガルの独立は実現するのであるが<sup>58)</sup>、独立回復後も体制に対する不満を代弁するようにこのメシアニズム運動は19世紀前半自由主義革命が勃発する頃までいっこうに下火にならない<sup>59)</sup>。そして次々に登場する自称メシアたちは異端審問制度・火刑式の犠牲者となっている<sup>60)</sup>。

民衆は政治的・社会的圧力によって抱かされた怨恨感情と内的に閉塞されてしまった『野生の思考』を同時代的で通時代的な共通の欲求不満・精神的苦悩と捉えたのであり、彼らなりにそれらを癒さんがために発動した手段がここで言うメシアニズム運動であったろう。

#### Ⅳ 民衆文芸テキスト編纂時代の到来

4.1 ポルトガル・ロマン主義の創始者ブルジョワ育ち、貴族趣味の Almeida Garrett (1779-1854) はフランス軍の侵略で1811年前後一家もろとも Açores の Terceira 島に避難せざるを得なかったが<sup>61)</sup>、そこで過ごした少年時代に故老の女中 Brígida と義母の Rosa de Lima から、美貌の王女、気品と勇敢を兼ね備えた騎士の登場する不思議で魅力ある数々の民間俗謡・物語を聞かされている<sup>62)</sup>。

後年彼は自由主義革命に意気軒昂で、'51年に成立する Saldanha (1790-1876) 政権が約40年間の内乱と改革に終焉をもたらすまで目まぐるしく変わる政権交代劇に巻き込まれ、3度の国外追放と2度の投獄を甘んじて受けなければならなかった<sup>63)</sup>。

4.2 しかし彼は追放先のイギリスで同時代のロマン主義運動に刺激を受ける。民間抒情詩・中世騎士物語を復興させることに尽力する数多くの作家・研究者との作品を通しての出会い<sup>64)</sup>。

『スコットランド辺境歌謡集』(3巻, 1803-03) の Walter Scott, ケルト族の英雄叙事詩『オニアン作品集』(2巻, 1765) の Macpherson, 社会環境と文学の関係に着目した『文学論』(1800) の著者 Staël 夫人, フランスで抒情詩復活の原動力となった『冥想詩集』(1820) を書いた Lamar-tine, 伝記文学の名著と誉れ高い『サー・ウォルター・スコット伝』(7巻, 1837-38) の Lockhart らのさまざまな作品に慣れ親しむ<sup>65)</sup>。

また Grimm 兄弟あるいは近代宗教学の始祖と言われる Müller の成果・業績に精通することによって文学的に愛国的靈感を得、実体験としてはスコットなどの詩的物語に全く遜色のない少年時代の追憶、民間俗謡・物語に思いを馳せ<sup>66)</sup>、民間伝承のテキスト蒐集(フィールド・ワークとしての直接採集ではない)については友人たちの惜しめない協力を得て<sup>67)</sup>、ルネサンスの文人によって葬り去られ、忘却の彼方に追い遣られ、軽蔑の眼を向けられてしまったポルトガルの抒情詩を再興させ、中世騎士物語を復興することを固く誓うのであった<sup>68)</sup>。

4.3 生涯3巻の『ポルトガル物語集 (Romanceiro)』(1875) を刊行する。第1巻と残り2巻にはテキストの扱い方に若干の相違が見られる。

第1巻は既に追放先のイギリスで書いた作品に現われる執筆姿勢が大きく影を落している。すなわち、物語の核になる部分だけをテキストにインスピレーションを求めて、あとは彼の全く自由な発想と想像で物語を再構成したのである<sup>69)</sup>。

残りの2巻は物語の原型を構築することに注意が払われ過ぎて、結局テキストに改竄(かいざん)してしまっている<sup>70)</sup>。これはむしろ文献学的な意味での原典批判作業ではない。テキスト・クリティークという点では3巻とも本来の民間伝承版を忠実に再現したものは一つもないのである。

4.4 やはり彼が Terceira 島で受けたカトリック的訓育と古典修養という2つの伝統的な教育が大きく作用したのであろう。

民衆の持つ《野生の思考》をそのまま客体として受容することは不可能のようであった。民衆は教養がなく無知で、また粗野で無作法であると捉え、真正のポルトガル文学の貴重な担い手・媒介

者ではあるが、その生粋さを必要に応じて改悪してしまっていると考えている。ここにこそ教養人 Garrett のテキスト改竄の彼なりの正当性を見出すことができるであろう<sup>71)</sup>。

## V 実証的文献学・民族学巨匠の時代 テキストの狩人たち

5.1 第1共和制(1910-16)の大統領を2度務めた行動的な政治家でもある、詩人・歴史家・文献学者・民族学者、Açores の S. Miguel 島出身の Teófilo Braga (1843-1924)<sup>72)</sup> は1867年自らの深い学識と桁外れの統合能力を生かし、わずか24歳の齡にして『ポルトガル総古歌謡・物語集 (o Cancioneiro e o Romanceiro Geral Português)』(2巻) [1906-09年改訂新版(3巻)刊行]、この分野では唯一の通史である『ポルトガル民間抒情詩史 (História da Poesia Popular Portuguesa)』[1902-05年2巻本第2版出版]を上梓し<sup>73)</sup>、続いて『アソレス諸島民話集 (Contos Populares do Arquipélago Açoriano)』(1869)、『ポルトガル民衆の伝統的民話集 (Contos Tradicionais do Povo Português)』(1883)の2冊<sup>74)</sup>を世に問うたのである。

かれの学問的方法論は忠実に資料を復元することを目指したもので、蒐集資料は量的にも豊富であり質的にも高水準に達し、現在でもその価値を失っていない。ただし Garrett 同様フィールド・ワークによる資料採集は行わず、もっぱら文献に依拠するところが大きい<sup>76)</sup>。

5.2 彼の民衆に対する考え方は人文主義者に近く《野生の思考》の一つの側面をやはり否定的に捉え、燃え盛る原罪を本性とする彼らの野生を通して原初的な人間の集合的心理を理解しようとしている<sup>77)</sup>。

無意識なる主観の非人格的な所産である民衆抒情詩抜きにしては、意識的に推敲された個人による産物である真正の抒情詩は存在し得ない。前者を定礎・出発点として発展したものが後者である。この両者の絆帯が切断されてしまうと抒情詩そのものが人工的なものに墮し、貧困化し、存在価値を全く喪失してしまうと述べている<sup>78)</sup>。

5.3 実直な人柄であり、有言実行の人であった<sup>79)</sup> Adolfo Coelho (1847-1919) は1879年『ポルトガルの民話集 (Contos Populares Portugueses)』を発表するが、資料は民衆からの直接採集、文献、友人からの提供された情報と種々雑多で<sup>80)</sup>、またテキスト校訂はかならずしも厳密とはいえない<sup>81)</sup>。

形態論的に地方色を残すことに注意が払われた点は評価される。テキストを増幅したり、飾り立てることは差し控えたものの、反復語句を削除したり、数種類の代名詞を付加したり、破格な形態を訂正したりしたところに難は残るのである<sup>82)</sup>。

5.4 彼の民衆観はやはりユマニストに等しく彼らは教養がなく遅れていると言うものである。感性の支配と直感の軛に縛られてその行動様式は排他的に無思考的であり、伝統と野蛮なる経験を機械的に繰り返すのみであり、知の束を組織的に体系化する能力は全くないと断じている<sup>83)</sup>。

民衆が産み出す芸術はそれ自身純粋な靈感に満ち、イメージは豊かであるけれども、知的高位の文化に釣り合うための必要な知的修養に欠けているので、知的に洗練されたより優位の質を持つ芸

術作品からはかけ離れていると言う<sup>84)</sup>。

しかしここにこそ彼の真骨頂が発揮されるのである。彼は無類の教育者である。個人と民族の心理学を専門領域とする研究者であると自認する彼は研究の成果を教育問題に応用することを責務と感じている<sup>85)</sup>。民衆に後天的学校教育を施すことによって民衆を啓蒙し、優位に立つ教養階級に知のレベルで上昇させ追いつかせようと尽力するのである<sup>86)</sup>。

5.5 José Leite de Vasconcellos (1858-1941)。彼は自然科学系で修学し、医学部を卒業してわずか一年医者を勤めただけで国立図書館の館員となり、その後すぐにリスボン大学文学部（ロマンス系文献学）に職を得る。教鞭をとる傍ら、研究活動を継続し、'29年には退職して学究生活に専念することになる。専門論文・概説書も含めて彼の著書は膨大な量に上る。生涯の夢はポルトガル民衆史と、民族誌学も含む民族学概論を執筆することであった<sup>87)</sup>。

説話関係の著作を挙げると『ポルトガル民間伝承 (Tradições Populares de Portugal)』(1882), 『ポルトガル物語集 (Romanceiro)』(2巻, 1958, 60), 『民話集と伝説 (Contos Populares e Lendas)』(2巻, 1964, 69), 『ポルトガル民間歌謡集』(第1巻, 1975)である<sup>88)</sup>。

5.6 彼はロマン主義の代表的な歴史家 Alexandre Herculano (1810-77) がポルトガル国民意識（国民性）を明らかにするために歴史研究を行っている姿に賞讃の眼を向け、自らは文献学と民族学の領域でポルトガル国民意識（国民性）を構成する要素（言語・民間伝承・民族）の研究を通してそれを白日の下にさらそうと決意し、学術誌「ルシタニア誌 (Revista Lusitana)」(全38巻, 1887-1943)を創刊したのである<sup>89)</sup>。

彼が初めてフィールド・ワークを実践したのであり<sup>90)</sup>、既に本文で紹介した民衆的な抒情詩はその成果の一端を伝えるものであろう (1.4)。

5.7 進化論者と同様に彼は人間の精神的等質性を信じ、民衆を粗野で無知なものとしながらも、洗練された博学な人間の属性をすべて能力的に持ち得ることを受容しようとしている<sup>91)</sup>。

各地で採集した同時代の民衆的な抒情詩と伝統的な古歌謡に共通する繊細な心理描写、高邁な精神を具体的に読み取ることで<sup>92)</sup>、《野生の思考》に対するポジティブな評価を獲得することに成功したのであろう。

また発育途上にある胎児であると規定した民衆<sup>93)</sup>の文芸研究を通して異なった国における伝統文化の同一性（普遍性）を説明しようとした先人の一人でもあった<sup>94)</sup>。

## VI Epilogus 現在の民族学（民族誌学）研究動向

6.1 1974年の革命後政治的に高まる地方分権主義の波に乗るように、地方文化の保存・採集を一つの目的とし<sup>95)</sup>、「ルシタニア誌 (Revista Lusitana)」はおおよそ40年の休刊の末に Vasconcellos の弟子の数名の熱情的な努力の賜物として1981年に復刊されている<sup>96)</sup>。

また Vasconcellos が生前それなりに評価はしていたが、大部分を書き改めなければならぬと考

えていたためにそのままになっていた、ポルトガル文化の基本的な文献である<sup>97)</sup>記念碑的著作『ポルトガルの宗教 (Religiões da Lusitânia)』(3巻, 1897, 1905, 13)も1981年に復刻版が刊行されている。

6.2 Dom Quixote 出版が「民族学(民族誌学)と文化人類学叢書」の一つとして《シリーズ・身近のポルトガル》を刊行し始めたのも最近のことである。Teófilo Braga, Adolfo Coelho の主要書も目録に掲載されている<sup>98)</sup>。注目しておきたい出版活動である。

## VII Appendix

7.1 騎士道物語に由来するジャンルの物語 (romance) である (原型は既に16世紀スペインで歌われている<sup>99)</sup>) が, 民衆的な抒情詩の伝統が韻文的形式と妻が夫を案ずる切ない気持ちによく表われている。

### 7.2

#### A Bela Infanta

- 1 Estando a bela infanta — no seu jardim assentada,
- 2 Com pente d'ouro na mão — seu cabelo penteava.
- 3 Deitou os olhos ao mar — onde viu vir ãa armada.
- 4 Capitão que nela vinha, — oh que tão bem a guiava!
- 5 — Diga-me, senhor capitão, — diga-me pela sua alma,
- 6 Um amor que eu lá trago — se lá vem naquela armada.
- 7 — Nem o vi, nem o conheço — nem sei que trajo levava.
- 8 — Levava cavalo branco, — por cima sela doirada;
- 9 Na ponta do seu chapéu — um cristal d'ouro levava.
- 10 — Pelos sinais que me dais, — lá ficou morto na guerra;
- 11 Debaixo dum alecrim<sup>100)</sup> — mil facadas lhe lá deram.
- 12 — Ai de mim que estou viúva! — Triste de mim que farei?
- 13 Com a auga<sup>101)</sup> dos meus olhos, — filhinhos, vos lavarei!
- 14 Co'a touca do meu cabelo, — filhinhos, vos limparei!
- 15 — Quanto déreis<sup>102)</sup> vós, senhora, — a quem vo-lo traz<sup>103)</sup> aqui?
- 16 — Dou-vos rasas de dinheiro, — quantas eu possa medir.
- 17 — Não quero vosso dinheiro, — que não é dado a mim:
- 18 É p'ra condes e marqueses, — para essa gente assim.
- 19 Quanto déreis vós, senhora, — a quem vo-lo traz aqui?
- 20 — Dou-vos ouro, dou-vos prata, — serei mais rico ca<sup>104)</sup> mim.
- 21 — Não quero vosso ouro, nem prata — que não é dado a mim:
- 22 É p'ra condes e marqueses, — para essa gente assim.
- 23 Quanto déreis vós, senhora, — a quem vo-lo traz aqui?
- 24 — Dou-vos o meu manto d'ouro, — com qu'eu cobria a mim.
- 25 — Não quero vosso manto d'ouro, — que não é dado a mim:
- 26 É p'ra condes e marqueses, — para essa gente assim.

- 27 Quanto déreis vós, senhora, — a quem vo-lo traz aqui?  
 28 — Três moinhos, que eu tenho, — todos serão para ti:  
 29 Um de prata e canela; — oitro<sup>105)</sup> d'oiro<sup>106)</sup> e marfim;  
 30 Oitro de moer o trigo — para vós e para mim.  
 31 — Não quero vossos moinhos, — que não é dado a mim:  
 32 É p'ra condes e marqueses, — para essa gente assim.  
 33 Quanto déreis vós, senhora, — a quem vo-lo traz aqui?  
 34 — Não tenho mai que vos dar, — nem vós mais que me pedir.  
 35 — Só peço, a vós, senhora, — o vosso corpo gentil.  
 36 — Cavalheiro que tal diz — à força mer'cia ir,  
 37 Ou a nau onde ele veu — eu a veja já afundir!  
 38 — Alembra-te a ti, mulher, — quando eu daqui saí,  
 39 O anel d'oiro qu'eu tinha, — q'eu contigo reparti?  
 40 — Se tu eras o meu homem, — para que tiravas<sup>107)</sup> de mim?  
 41 — Dá-me, então, cá um abraço! — o anel, ei-lo aqui!

(Baião 県 S. Tomé de Covelas, 1902年. José Leite de Vasconcellos『ポルトガル物語集』(1958), 第1巻, p. 162-63.)

### 7.3 訳:

#### 美貌の王女

- 1 美貌の王女がいっちゃった — その庭に腰を下ろされて,  
 2 御手には黄金の櫛を御持ちで — その髪を櫛けずられていた。  
 3 海の彼方に視線をお遣りになり  
 — そこに一隻の軍艦が来るのを御覧になられた。  
 4 その艦に乗ってやって来られる船長よ, — 何と素晴らしく舵を操られる!  
 5 — 一つお伺いしたいのです, 船長殿,  
 6 私目が送り出しております愛しい人 — その殿御が乗船してはおりませぬか。  
 7 — 見たこともなく, そのような男は知らぬぞ  
 — どんな姿, 身なりをしているかも知らぬのに。  
 8 — 白い駿馬を従えておりました, — 馬には金の鞍を乗せて;  
 9 殿御の被る騎士烏帽子の先には — 金色の水晶玉が輝いておりました。  
 10 そなたが教えてくれた御印を頼りに思いだしてみるに,  
 — その男は戦地で命を落したぞ;  
 11 一本のマンネンロウの木の下で — 千にも上る刺傷を身に受けて。  
 12 ああ何ということでしょう, 寡婦になってしまったのね私は!  
 — この身の上が悲しい, この先どうすればよいのでしょうか?  
 13 両の眼から溢れる涙で — 子供たちよ, そなたらを洗ってあげよう!  
 14 私の頭巾で — 子供たちよ, そなたらを清めてあげよう!  
 15 奥方よ, そなたは何をくださろうか,  
 — そなたの元に殿御を連れてきたものに?  
 16 あなた様にどっさりお金を差し上げますわ,  
 — 私が計りうるすべてのお金を。  
 17 私はそなたのお金など欲しくはないぞ, — 私には向かない:  
 18 それは伯爵, 侯爵にくれてやればよかろう, — そういう類の連中に。  
 19 奥方よ, そなたは何をくださろうか,  
 — そなたの元に殿御を連れてきたものに?

- 20 あなた様に金と銀を差し上げますわ、  
— そうしてあなた様は私などよりも裕福におなりになる。
- 21 私はそなたの金も銀も欲しくはないぞ、— 私には向かない：
- 22 それは伯爵、侯爵にくれてやればよろしかろう、— そういう類の連中に。
- 23 奥方よ、そなたは何をくださろうか、  
— そなたの元に殿御を連れてきたものに？
- 24 あなた様に私の黄金の外套を差し上げますわ、  
— それで私は身をくるんでいたのです。
- 25 私はそなたの黄金の外套など欲しくはないぞ、— 私には向かない：
- 26 それは伯爵、侯爵にくれてやればよろしかろう、— そういう類の連中に。
- 27 奥方よ、そなたは何をくださろうか、  
— そなたの元に殿御を連れてきたものに？
- 28 私が持っております三軒の風車小屋を、— すべてあなたに差し上げますわ：
- 29 一軒は銀と肉桂の皮でできております；  
— もう一軒は金と大理石で；
- 30 最後の軒は小麦を挽く風車小屋です — すべてあなた様と私のものです。
- 31 私はそなたの風車小屋など欲しくはないぞ、— 私には向かない：
- 32 それは伯爵、侯爵にくれてやればよろしかろう、— そういう類の連中に。
- 33 奥方よ、そなたは何をくださろうか、  
— そなたの元に殿御を連れてきたものに？
- 34 もうあなた様に差し上げるものは何もありません、  
— もうこれ以上お望みになってもだめですわ。
- 35 奥方よ、そなたに一つだけ望みがある、  
— そなたの柔らかい肉体が欲しいのだ。
- 36 名立たる騎士の方がそんなことをおっしゃるとは  
— 絞首刑にも値しましょうよ。
- 37 それとも殿御のありました戦艦に乗船し  
— 船もろともに沈没し、溺死して果てるがよろしかろう！
- 38 思い出すがよかろう、そこの淑女よ、— 私がここを出発した折、
- 39 私は金の指輪を持っていた、— そなたと半分ずつにしたではないか？
- 40 あなたが私の夫であったのならば、  
— 何のために私にそのようなお戯れをなされたのです？
- 41 さあここにおいで、抱擁してあげよう！ — ほらここに指輪がある！

〔註〕

- 1) 国王 D. Pedro I (1320–67), D. Fernando (1345–83) の大法官位の職にあった F. Álvaro Pais (c. 1275–1349) の書『王の鏡 (Speculum Regum)』(1341–44) に王権神授説を示す概念は明確に現われている。Vide Joel Serrão 監修, *Dicionário de História de Portugal*, Lisboa, 1971, vol. I, p. 8–14.
- 2) *Inquisição* の経済的な視点からの分析は A. José Saraiva, *Inquisição e Cristãos-Novos*, Porto, 1969. に負うところが大きい。Vide 松尾多希子「近世ポルトガル異端審問制度の起源と成立に関する試論」(東京外国語大学論集 16, 1967), p. 95–113; 拙稿「異端審問制度と宮廷劇作家 Gil Vicente」(大阪外国語大学学報第74号, 1987), p. 87–96; 同「私説『視覚映像文化論』(その2: 黒沢明『生きる』とポルトガル異端審問制度・火刑式)」(大阪外国語大学 AV Journal 第13号, 1988. 3), p. 11–15.
- 3) A. H. de Oliveira Marques, *História de Portugal*, Lisboa, 1972–74, vol. I, p. 391–96.



- 4) Vitorino Magalhães Godinho, *Finanças Públicas e Estrutura do Estado* (Joel Serrão 監修, op. cit.), F 項.
- 5) J. Lúcio de Azevedo, *História dos Cristãos Novos Portugueses*, Lisboa, 1921, p. 9, 14, 45, 363, 395. D. Afonso V(在位1438-81) 治世下その腹心として栄華を誇った Isaac Abravanel とその一族は典型的な一例であろう。
- 6) Frei Amador Arrais, *Diálogos*, Lisboa, 1944, p. 26.
- 7) 拙稿「私説『視覚映像文化論』(その2: 黒沢明『生きる』とポルトガル異端審問制度・火刑式)」, p. 13-15.
- 8) 同上「異端審問制度と宮廷劇作家 Gil Vicente」, p. 87-91.
- 9) 18世紀後半フランス啓蒙思潮の影響を受けた2人の《外国崇拜者》Ribeiro Sanches (1699-1782), Luís António Verney (1713-92) の尽力によって臨床医学のための解剖学実験室 (Teatro Anatómico) が1772年 Coimbra 大学に創設されるのである。Joel Serrão 監修, op. cit, vol. III, p. 5, 849; ibid, vol. IV, p. 274-75.
- 10) Horatius, *Odae* (3:1:1) に *odi profanum vulgus et arceo*. とある。
- 11) Sá de Miranda, *Obras Completas*, Lisboa, 1937, vol. II, p. 148; Luís de Camões, *Os Lusíadas*, VII, est. 85, v. 1-4.
- 12) A. H. de Oliveira Marques, op. cit, vol. I, p. 272-73.
- 13) モンテーニュ, 原二郎訳『エッセー』(第1巻), 東京(筑摩書房), 1962, p. 150-59 (第31章 食人種について)。
- 14) 同上書, p. 225-26 (第54章 つまらぬ器用さについて); p. 99 (第25章 術学について); p. 127 (第26章 子供の教育について); p. 188-195 (第42章 われわれの間にある差異について)。
- 15) 本文でも後述される (1.4; 5.5-5.7; 6.1) José Leite de Vasconcellos の出現を待たなくてはならない。
- 16) 13世紀末に Portugal 宮廷で編纂された *Cancioneiro da Ajuda* のアジュダ図書館に現存するものは同時期に製作された写本である。14世紀に編まれた *Cancioneiro da Vaticana*, *Cancioneiro da Biblioteca Nacional* の現存本はイタリアで作られた15世紀半葉または16世紀初頭の写本である。
- 17) A. H. de Oliveira Marques, op. cit, vol. I, p. 146.
- 18) ibid, p. 147.
- 19) ibid, p. 146.
- 20) *El Cancioneiro de Juan Alfonso de Baena*, publicado por Francisco Michel, Leipzig, 1860, p. XII.
- 21) A. H. de Oliveira Marques, *A Sociedade Medieval Portuguesa*, Lisboa, 1964, p. 209.
- 22) *Cantigas d'Escarnho e de Mal Dizer* (2. ºed.), revista e acrescentada por M. Rodrigues Lapa, Vigo, 1970, p. 310-11. Vide「ひろば」(大阪外国語大学学生部広報 第93号), 1988. 7.1, p. 26. に mãe(母)についての文献学的な解説をするにあたってこの *cantiga* を利用している。この戯歌は現代語でステレオタイプ化されている極めて下品な畜生俗語 *foda a mãe* (E. mother fucker に相当する) の《始源的な温床》といえるかもしれない。因に E. son of a bitch のポルトガル版は *filho da puta (mãe)* であるが、この代表的な2つの俗語の頻度はネイティブの intuition によると後者が圧倒的であって、前者が使用されることは非常に稀であるということである。
- 23) Dámaso Alonso, *Cancioncillas de amigo mozárabes* in *Revista de Filología Española*, Madrid, t. XXXIII, 1949, p. 319.
- 24) Manuel Viegas Guerreiro, *Para a historia da Literatura Popular*, Lisboa, 1978, p. 42-43.
- 25) José Leite de Vasconcellos, *Etnografia Portuguesa*, Lisboa, 1933, vol. I, p. 31-36.
- 26) José Leite de Vasconcellos, *Opúsculos*, Lisboa, 1938, vol. VII, p. 736-45.
- 27) Manuel Viegas Guerreiro, op. cit, p. 43.
- 28) José Leite de Vasconcellos, *Cancioneiro Popular Português*, Coimbra, 1975, vol. I, p. 297-98.
- 29) N.º 890 do *Cancioneiro da Vaticana*. José Joaquim Nunes, *Crestomatia Arcaica* (2. ºed.), Lisboa, 1921, p. 356-540.

- 30) D. Duarte, Leal Conselheiro, actualização ortográfica, introdução e notas de João Morais Barbosa, Lisboa, 1982, p. 25, 324, 325, 335–39.
- 31) Manuel Viegas Guerreiro, op. cit, p. 52.
- 32) Teófilo Braga, História da Poesia Popular Portuguesa, Porto, 1867, p. 161–65.
- 33) ロマン主義の歴史家 Alexandre Herculano はこの伝説に想を得て同題で小説を書いている。A. Herculano, Lendas Narrativas II (Coleção Livros de Bolso Europa-América 232), Mem Martins, p. 13–42. Vide Teófilo Braga, Contos Tradicionais do Povo Português (Col.: Portugal de Perto, n.º 15), Lisboa, 1987, vol. II, p. 70–71.
- 34) Teófilo Braga, op. cit, 1987, vol. II, p. 69–70.
- 35) ibid, p. 171–97.
- 36) Manuel Viegas Guerreiro, op. cit, p. 53.
- 37) 1172年から1252年にかけて建立されたシトー教団のポルトガルにおける中心的建造物とされる Alcobaça 修道院はロマネスク様式とゴシック様式の折衷建築であり、付属古文書館に所蔵される写本は330点に上る。そのうち25点は12世紀に、約228点は13世紀と14世紀初頭に属する。一方14世紀末のものはわずか40点、1475年以前の15世紀のものは36点に過ぎない。
- 38) Orto do Esposo, fls. 89–90. Ms. 274 da Livraria de Alcobaça, hoje na Biblioteca Nacional de Lisboa. Francisco Adolfo Coelho, Contos Populares Portugueses, Lisboa, 1897, p. XVI, XVII, p. 159–60; Teófilo Braga, op. cit, 1987, vol. II, p. 80–81.
- 39) Teófilo Braga, op. cit, 1867, p. 392.
- 40) 異端審問制度は文学作品の検閲にまで厳しく触手を伸ばしている。Vide Raul Rego, Os índices expurgatórios e a cultura portuguesa (Col: Biblioteca Breve vol. 61), Lisboa, 1982; A. H. de Oliveira Marques, op. cit, 1972–74, vol. I, p. 407; Paul Teyssier, Gil Vicente – O Autor e a Obra (Col: Biblioteca Breve vol. 67), Lisboa, 1982, p. 25–29.
- 41) Teófilo Braga, op. cit, 1867, p. 322–23.
- 42) 拙稿「1531年1月26日発生した地震とユダヤ人迫害の集団ヒステリー」(大阪外国語大学口承文芸研究会 世界口承文芸研究第9号, 1987); 同「異端審問制度と宮廷劇作家 Gil Vicente」(大阪外国語大学学報第74号, 1987), p. 87–96.
- 43) Gil Vicente, Obras Completas, Lisboa, 1943, vol. IV, p. 261–62.
- 44) Gil Vicente, op. cit, vol. VI, p. 58.
- 45) António José Saraiva, A Cultura em Portugal (Teoria e História), Lisboa, 1981, liv. I (Introdução Geral à Cultura Portuguesa), p. 180–82.
- 46) Vide José Leite de Vasconcellos, Romanceiro Português, 1958, vol. I, p. 16–19.
- 47) Manuel Viegas Guerreiro, op. cit, p. 61.
- 48) ibid, p. 65.
- 49) Fernão Lobo Soropita, Prosas e Rimas Inéditas, pref. e notas de Camilo Castelo Branco, Porto, 1868, p. 103. F. Adolfo Coelho, Para a História da Instrução Popular, Lisboa, 1973, p. XV; Teófilo Braga, op. cit, 1987, vol. I, p. 163–65.
- 50) 庶子である D. Afonso Sanches (?–1329) を王位継承者とする国王 D. Dinis と嫡男 D. Afonso (1291–1357. 後の国王 D. Afonso IV) の間に生じた王位継承権をめぐる骨肉の争いを平和的解決に導いた立役者・仲介者として有名である。アラゴン国王 D. Pedro III の娘であり、生前名にし負う慈善事業家、没後1625年聖列に加えられた。拙稿「ポルトガル教材考 (1)」(大阪外国語大学口承文芸研究会 世界口承文芸研究第8号, 1986), p. 467–78.
- 51) F. Adolfo Coelho, op. cit, p. XIII.
- 52) Teófilo Braga, op. cit, 1987, vol. II, p. 270–99.
- 53) Gonçalo Fernandes Trancoso, Contos e Histórias de Proveito e Exemplo (Texto integral conforme a edição

- de Lisboa, de 1624), pref. e notas de João Palma-Ferreira, Lisboa, 1974; Manuel Viegas Guerreiro, op. cit, p. 67.
- 54) Gonalo Fernandes Trancoso, op. cit, p. XI–LXXXVI; Te3filo Braga, op. cit, 1987, vol. II, p. 43–47; ボッカッチョ, 柏熊達生訳『デカメロン』世界文学全集』II–1, 河出書房新社, 1975, p. 17; M3rio da Costa Roque, As Pestes Medievais e o《Regimento proueytoso contra ha pestenenga》Lisboa, Valentim Fernandes (1495–1496), Paris, 1979, p. 215, 217, 333.
- 55) M3rio da Costa Roque, op. cit, p. 324, 328–32, 333; 拙稿「ポルトガルのベスト養生訓」(大阪外国語大学学報第72–2号, 1986), p. 27–39.
- 56) Gonalo Fernandes Trancoso, op. cit, p. 53–62; Manuel Viegas Guerreiro, op. cit, p. 67; Te3filo Braga, op. cit, 1987, vol. II, p. 110–12.
- 57) Joel Serr3o 監修, op. cit, vol. I, p. 288–89; ibid, vol. III, p. 810–17; J. L3cio de Azevedo, A Evolu3o do Sebastianismo (2. 3 ed.), Lisboa, 1947, p. 9; Une copie Madril3ne des《Trovas》de Bandarra por Claude-Henri Fr3ches, in Arquivo do Centro Cultural Portugu3s de C. Gulbenkian, 1970, vol. II, p. 282–316; Manuel Viegas Guerreiro, op. cit, p. 64–65.
- 58) J. L3cio de Azevedo, op. cit, p. 54–55, 57, 76; Yvone Cunha R3go, Feiticeiros, Profetas e Vision3rios, Lisboa, 1981, p. 183–184, 212, 220, 243; Jos3 Loureno de Mendoa e Ant3nio Joaquim Moreira, Hist3ria dos Principais Actos e Procedimentos da Inquisi3o em Portugal, Lisboa, 1980, p. 145–279.
- 59) J. L3cio de Azevedo, op. cit, p. 88, 99, 102.
- 60) ibid, p. 113; Joel Serr3o 監修, op. cit, vol. III, p. 816.
- 61) Ant3nio Jos3 Saraiva e 3scar Lopes, Hist3ria da Literatura Portuguesa (9. 3 ed.), Porto, 1976, p. 749–788; Manuel Viegas Guerreiro, op. cit, p. 70.
- 62) Almeida Garrett, Romanceiro, Lisboa, 1875, vol. I, p. 14–15.
- 63) Manuel Viegas Guerreiro, op. cit, p. 71.
- 64) Almeida Garrett, op. cit, vol. II, p. XII.
- 65) ibid, p. XLIV.
- 66) ibid.
- 67) ibid, p. XIX.
- 68) Almeida Garrett, op. cit, vol. I, p. 14–15.
- 69) Manuel Viegas Guerreiro, op. cit, p. 73–74.
- 70) Almeida Garrett, op. cit, vol. I, p. XI.
- 71) Manuel Viegas Guerreiro, op. cit, p. 74–75.
- 72) Ant3nio Jos3 Saraiva e 3scar Lopes, op. cit, p. 904–906.
- 73) Manuel Viegas Guerreiro, op. cit, p. 79–80.
- 74) ibid.
- 75) ibid.
- 76) ibid.
- 77) Te3filo Braga, Hist3ria da Poesia Popular Portuguesa, 1902–03, vol. I, p. VIII, p. 1–3.
- 78) ibid, p. 4.
- 79) F. Adolfo Coelho, op. cit, p. 18–19.
- 80) Manuel Viegas Guerreiro, op. cit, p. 84.
- 81) F. Adolfo Coelho, Contos Populares Portugueses, Lisboa, 1879, p. V.
- 82) ibid.
- 83) F. Adolfo Coelho, 《A pedagogia do povo portugu3s》, in Revista Portug3lia, Porto, 1898, vol. I, p. 475–96.
- 84) ibid.

- 85) F. Adolfo Coelho, op. cit, Lisboa, 1973, p. 47 (introdução).
- 86) ibid.
- 87) Manuel Viegas Guerreiro, op. cit, p. 86-87.
- 88) ibid, p. 109.
- 89) Revista Lusitana (Nova Série), Lisboa, 1981, vol. I, p. XI-XII.
- 90) José Leite de Vasconcellos, op. cit, Lisboa, 1933, vol. I, p. 31-36.
- 91) Manuel Viegas Guerreiro, op. cit, p. 88.
- 92) José Leite de Vasconcellos, Cancioneiro Popular Português, Coimbra, 1975 (vol. I); ibid, Tradições Populares de Portugal, Porto, 1882.
- 93) ibid, op. cit, 1882, p. VII.
- 94) ibid, p. VIII-IX.
- 95) Revista Lusitana (Nova Série), Lisboa, vol. I, p. VII.
- 96) ibid, p. V-VI.
- 97) ibid, p. IX.
- 98) Teófilo Braga, O Povo Português nos Seus Costumes, Crenças e Tradições; ibid, Contos Tradicionais do Povo Português; F. Adolfo Coelho, Contos Populares Portugueses.
- 99) António José Saraiva, op. cit, 1981, p. 185-87; Menéndez Pidal, Romancero hispánico, Madrid, 1953, II, p. 408.
- 100) alecrim は学名 *Rosmarium officinalis* と呼ばれ、地中海地方原産のシソ科常緑低木で調味料・香料に用いられる。ここで重要なことはこの木が象徴的に《忠実・貞操・追憶》を表わしていることである。より一層文学的な解釈・分析が成立すると思われるがここでは立ち入って analysis することはしない。cf. 聖書でお馴染みの *Fraxinus ornus*(マンナトネリコ) に関する構造的読み解きは拙稿「ポルトガル教材考(1)」(大阪外国語大学口承文芸研究会 世界口承文芸研究第8号, 1986), p. 467-78. を参照のこと。
- 101) auga は água の古形・方言。
- 102) déreis は時制・大過去であるが、ここでは条件法 (darieis) の代用である。
- 103) traz は現在時制であるが、ここでは接続法・半過去 trouxesse の意味である。
- 104) ca は que a (>qu'a) の短縮形。
- 105・106) oitro<outro, oiro<ouro.
- 107) tiravas はこの場合 zombavas, abusavas の意味で使われている。Vide Revista Lusitana (Nova Série), Lisboa, vol. V, p. 85-89 (José Joaquim Dias Marques; Maria Angelica Reis da Silva, Para o Romanceiro Português, p. 73-133.).